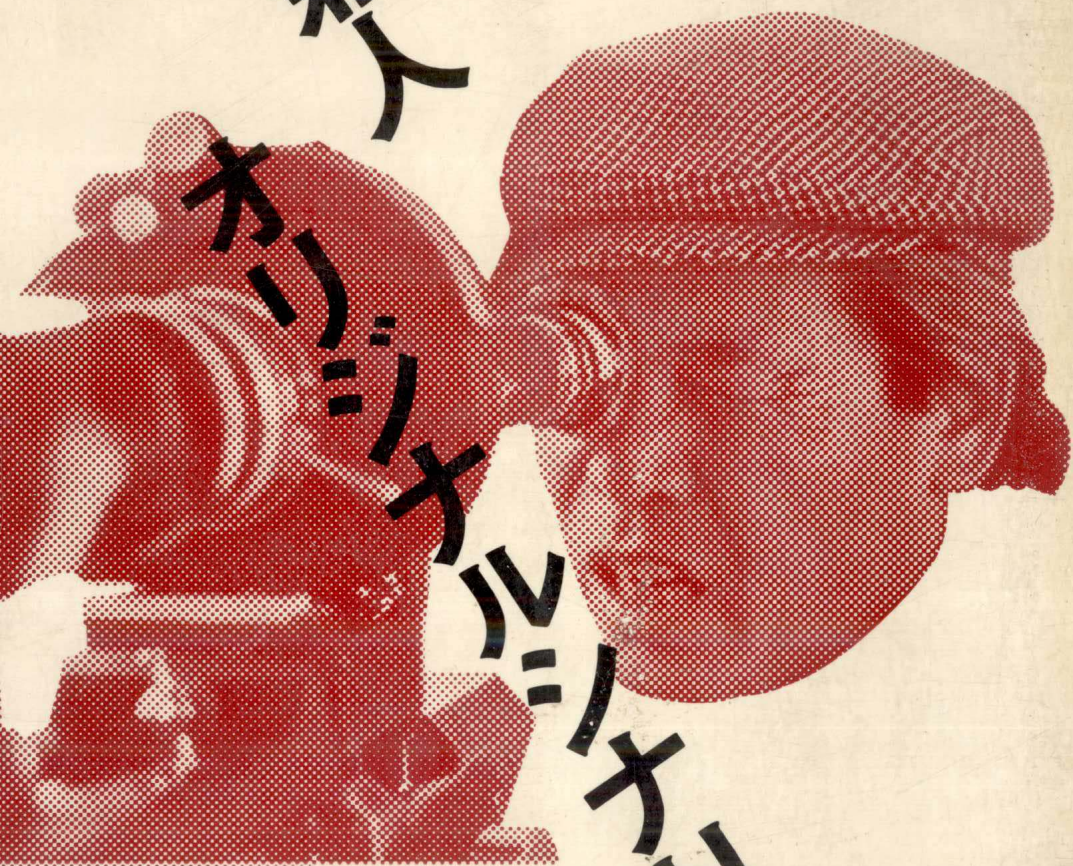


新藤兼人



カインとアベル
カインとアベル
カインとアベル

新藤兼人

カニシタハルシタニカニカ集

タカトシド社

著者紹介

新藤兼人（しんどう・かねと）

明治45年4月22日広島県に生まる。昭和9年

新興キネマ美術部に入る。溝口健二に師事。

昭和25年松竹を退社、「近代映画協会」を吉

村公三郎、絲屋寿雄らと創立。

代表作品——愛妻物語・縮図・裸の島・鬼婆

・本能・ある映画監督の生涯・竹山ひとり旅

・絞殺、ほか。

受賞——朝日賞・毎日芸術賞・ブリティッシ

ユフィルムアカデミー、モスクワ国際映画祭

グランプリ、ほか。

〈検印廃止〉

新藤兼人オリジナルシナリオ集

一九七九年六月一五日 初版発行

著者 新藤兼人

発行者 越後谷勇治郎

印刷所 東銀座出版印刷株式会社

株式会社松本精喜堂

製所本 株式会社徳住製本所

発行所 株式会社ダヴィッド社

東京都新宿区簗笥町三九

振替東京三一六三一四四

定価2,000円

©K.SHINDO

0074-400360-4408

目次

偽れる盛装

・一九五一年

・
・
・
3

裸の島

・一九六〇年

・
・
・
25

しとやかな獣

・一九六二年

・
・
・
38

鬼婆

・一九六四年

・
・
・
72

本能

・一九六六年

・
・
・
94

性の起原

・一九六七年

・
・
・
120

藪の中の黒猫

・一九六八年

・
・
・
142

かげろう

・一九六九年

・
・
・
163

わが道

・一九七四年

・
・
・
197

ある映画監督の生涯

・一九七五年

・
・
・
234

創作ノート

・
・
・
277

あとがき

大映京都映画作品・一九五一年

偽れる盛装

スタッフ

製作	監督	撮影	美術	音楽	君蝶	妙子	福彌	雪子	きく	千代
亀田耕司	吉村公三郎	中井朝一	水谷浩	伊福部昭	京マチ子	藤田泰子	柳恵美子	北河内妙子	瀧花久子	村田知英子

キャスト

とんぼ 友香 孝次 山下 伊勢 笠間 渡邊 せつ おとき 藤尾 北川博士 あんま

牧千草 橘公子 小林桂樹 菅井一郎 進藤英太郎 殿山泰司 河津清三郎 藤代鮎子 常盤操子 三好栄子 南部章三 石原須磨男

1 鮎吉（貸座敷）の一室

さつと障子が開き——黄昏の加茂川風景が展望される。

君蝶は縁の簾の椅子に体を投げ出すようにかける。微醺を帯びた艶姿。

君蝶「ああ、ええ風やなあ……」

座敷はほの暗い。鮎台のお鈴子を前に四十恰好の男——笠間は硬い表情で君蝶の横顔を覗めている。

笠間「（なじる口調）今更あんまりやないか……ひどいやっちゃ」

君蝶「（軽く応酬）うち、あんたはんの奥さんにして貰うたんと違いまっせ。別れたい時は別れさして貰います」

笠間「（感情を抑えて）薄情なおなごや、金の切れ目が縁の切れ、ちゅうわけか」

君蝶「（涼しい顔）まあ、そうどっしやるな（と座敷へ来て電燈をつける）どうせうちら、お金で結ばれた関係やさかい」

と坐り、煙草をくわえてライターを鳴らす。

笠間、怒りを抑えてみつめるが——急に哀願的になる。

笠間「君蝶、わしはお前と別れとうない……今にわしかて盛り返してみせる。これでもブローカー仲間じゃ顔の売れた男や。屹度ひと当て当てて見せる……な、頼む、今迄通りの関係が続けてくれ」



な体を提供してまっせ」

ふり切るように出て行こうとする。

笠間「待て！」

手首を掴む。

君蝶「なんどす！」

きつとなり、ふり向き——一瞬の対立。

どつと沸き起る二階の馬鹿騒ぎ。

君蝶「しよむない、離しとくれやす」

ふり切り、さっさと出て行く。笠間、惨めにとり残される。

2 福寿楼（お茶屋）の表

君蝶、輪タクから下りて、入る。

3 座敷

山下が仲居を相手に飲んでいる。商家の番頭然たる油っこい男。

障子の外で「こんばんは」と声あり、君蝶入ってくる。

君蝶「お姐さん、こんばんは、おおきに」

ここでは別人のように可愛い声と顔の君蝶である。

仲居「君蝶はん、せんど待たさはつてるよつて、えらいお冠りどつせ」

と、山下を見る。

君蝶「（山下に色気たっぶり）山下はん、かんにんどつせ」

山下「（色男ぶり）どこぞええ男と逢うて来

たとと逢うけえ」

君蝶「いやア、かなわんわ……顔みとくれや

す。そないええこと書いたりまっか」

と顔を突き出せば、山下それを覗きこむ。

山下「けつたいな具合やぞ、大っきい字が書いてるわ」

君蝶「（こぼれるような色気を眼に）ほな、ようみとくれやす。山下はんちゅう字と違いまっか」

仲居「おおきにござんはん（と立ち）、邪魔者は退散や、退散……」と出て行く。

君蝶、膝をすらしてすり寄り。急に純情型になる。

君蝶「（しほらしく）お待たせしてすんまへん。かんにんどつせ」

山下「ええがな、もう、一時間ばかり待っただけや（懐中からふく紗包の一万円を出し）約束のもん、持って来たぜ……」

君蝶「（すまなさそうに）ほんまに持って来とくれやしたんどすか」

山下「（得意）ちゃあんと約束したやないか。嘘つくような男と逢うで……さあ、しもうとき」

君蝶「えらいすんまへん。ほな、頂かして貰いまっせ」

と懐の所へ行き、胸に納める。

山下「きんのは吃驚したで……店へ電話したらあかんやないか」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

と立つ。反射的に笠間も立つ。

笠間「（強く）とことんしほり抜いて——それが別れの挨拶か！」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

と立つ。反射的に笠間も立つ。

笠間「（強く）とことんしほり抜いて——それが別れの挨拶か！」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

と立つ。反射的に笠間も立つ。

笠間「（強く）とことんしほり抜いて——それが別れの挨拶か！」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

と立つ。反射的に笠間も立つ。

笠間「（強く）とことんしほり抜いて——それが別れの挨拶か！」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

と立つ。反射的に笠間も立つ。

笠間「（強く）とことんしほり抜いて——それが別れの挨拶か！」

君蝶「（ひるまず）ふん、人ぎきの悪いこと

いわんといとくれやす。こっちゃかて大事

君蝶「そやかて、急に逢いとうなつたんやも
ん。しょうがおへん」

山下「二十年間堅氣一本で勤め通した速神丸
の山下やよつてな、こないことが知れたら
信用がた落ちや」

君蝶「(眼にものいわせ)うちと速神丸と、
どっちが大事どす」

山下「そら、どつちやも大事やがな」

君蝶「あかんあかん、はつきりいうとくれや
す(と膝をゆする)」

山下「(デレツとなり)困ったこつちやな、
分つてやないか」

君蝶「ほな、うちどすか、早ういうとくれや
す」

山下、いきなり抱きしめて、ウナジに接
吻する。

障子の外から仲居の声。

仲居の声「君蝶はん、おうちからお電話どつ
せ」

君蝶「(抱かれた儘)へえ、おおきに」

4 静乃家(お茶屋)の電話口

妙子、電話をかけている。お茶屋の環境
に溶けぬ近代的な女。

妙子「姉ちゃん? うち妙子、母ちゃんが
ね、すぐ帰ってくるようにって——」

5 福寿楼の電話口

君蝶「何の用や、渡辺はん?(顔色が変わり、
声を尖らす)又来てはるの、相手にしたら

あかんちゅうてるのに——」

6 静乃家

妙子「うちに文句いうたつて知らん。早く帰
つて(と切る)——」

奥から、福弥がお座敷姿で出て来る。

「抜けるように白い腺病質な芸妓。」

福弥「お姐さん、行つてきます」

妙子「どこのお座敷?」

福弥「へえ、鈴木楼どす」

妙子「じゃ福寿楼へ一寸寄つて、姉ちゃんに
早く帰るようにって」

福弥「へえ行つてきます(と玄関へ)」

妙子「福弥さん、ごはん食べないんでしょ
う」

福弥「すんまへん、あとで頂きますよつて……」

妙子「体の具合が悪かったら、休んでもいい
のよ」

福弥「へえおおきに」

土間の暗がりから、めし焚き婆さんが出
て来て、福弥の覆物を揃えてやる。福弥

は「おおきにすんまへん」と出て行く。
妙子「(婆さんに)渡辺さんのお靴、一寸拭
いといてね」

婆さん「へえ」

と土間にある男物の靴を取上げる。

7 二階座敷

きくと渡辺秀雄。きくは三十年間をくる

わで生き抜いた初老の女——色白で小
柄。

善良そうな瞳の奥に失われた色香が窺え
る。秀雄は四十前の良家の育ちを感じさ
せる男——今は亡ききくの旦那の長男。

秀雄「頼めた義理ではないのやけど……ここ
より他に行くところがないよつて……」

きく「へえ、おおきに……でけるだけの事は
さして貰いますよつて、どうぞ安心しとく
れやす」

秀雄「きくさんにそういつて頂くと助かるん
だ(と頭を下げる)」

きく「しよむない真似せんとくれやす。ほん
なら、三、四日のうちに何とかご返事しま
すよつて……」

秀雄「有難う。じゃ宜しく頼む。君蝶さん
にも会つてお願いして帰ろうと思つたんだ
が、また出直してくる(と立つ)」

8 階下玄関

きく、先に下りて来て靴ペラを差出す。

秀雄「じゃ」

きく「ご隠居様にどうぞ宜しゅう」

秀雄、出て行く。居間から君蝶が顔を出
す。

君蝶「お母ちゃん、断つたんやろな」

きく「なんや、帰つてたんかいな、なんで顔
出ししやはらへんの。会いたがつてやはつ
たのに……」

君蝶「あの人の顔みてる、胸くそ悪うてか
なんね、またゼニの無心やろ」

きく、黙って居間へ。

9 居間

きく、長火鉢の前に坐る。君蝶、食べか
けの茶漬をかきこむ。

君蝶「なんて返事しやはったん。ええ顔した
んと違うか」

妙子、編物をしながら、背中二人の話を
聞いている。

きく「うただけを頼りに、ああして来やはる
んやないか。薄情な事もいえへん」

君蝶「(強く) 薄情やあらへんがな。無い袖
はふれしまへん。二十万ちゅうお金が、あ
てらにおいそれと都合でけますかいな。考
えてみても分りそうなもんや」

きく、気弱そうな眼を伏せる。お茶を淹
れながら呟くように、

きく「会社は潰れる。社員には持ち逃げされ
る、ほんまにステテンテンにならへったん
や……お金の工面がでけななら、若旦那
は刑務所いきやろ」

君蝶「刑務所なと警察なといつてもろたらよ
ろしいがな。せんどうちを飲み喰い潰し、
借金を踏み倒したうえに二十万貸せ……ど
こを押したらそんな理屈が出るね」

きく「はやかてな、よう考えてみいな。秀雄
はんとお前は何や、腹違いにせえ兄妹やな

いか」

君蝶「ふん、うちらはおメカケはんの子や」
妙子「姉ちゃん、もういいわ」

君蝶「あんたは黙つといで! (と母に) お母
ちゃん、渡辺はんが死なはった時に、うち
ら、はつきり縁が切れた筈やないか。向う
から縁を切らはったんや。渡辺家とはあか
の他人どつせ」

きく「そやかてな……」

と同情を求めるように妙子を見る。

君蝶「腹が立つつとやな。どないなつもりで
母ちゃんはいやはるの。さかさまにふった
かてうちらに、もう鼻血も出えしまへんが
な」

きく「(低く) この家を抵当にしたら借りら
れるやろ」

君蝶「(激しく) 阿呆な事いわんときおし。
この家がないようになつたら、うちどこへ
寝るんどす。親子三人乞食でもするんどっ
か」

がらり、格子戸の開く音がし、土間続き
に、とんぼ(若い芸妓)が駆けこんでく
る。

とんぼ「(息を弾ませ) お母さん、えらいこ
つです。福弥はんが……」

きく「え、なんで……」

とんぼ「へえ、鈴木楼で舞うてはって……血
いはかばったんどす」

三人、はつとなり、とんぼを見守る。

とんぼ「早う来とくれやす。いま病院へ担ぎ
こまはったんどつせ」

きく、土間へ駆け下り、下駄を突っかけ
て表へ。とんぼ続く。

君蝶「ろくなことあらへん」

10 物干台(朝)

見渡すかぎり波打つような屋根瓦の起伏
——黒ずんだその波状の上に朝の太陽が
輝いている。

妙子、洗濯物を抱えて上り、敷布等を干
し、下へ梯子を伝う。

11 二階の表座敷

君蝶、まだ寝ている。妙子、枕許へ膝を
折る。

妙子「姉ちゃん」

君蝶「……(寝返りを打つ)」

妙子「姉ちゃん」

君蝶「うるさいな、なんや」

妙子「きょう話すわ。結婚してもいいでし
よ」

君蝶「ごちゃごちゃいうてんと、したらええ
がな」

と蒲団を被ってしまふ。

12 階下玄閣

妙子、下りてくる。居間からきくが声を
かける。

きく「早ういかな遅れるやろ」

妙子「きょうは自転車で行くわ」

土間へ下り自転車を持ち出す。

13 小路

両側にずらりと建ち並ぶお茶屋の千本格子。

妙子、自転車で走り出て行く。

14 色街の通り

未だ眠り覚めぬくるわの朝。妙子の自転車が軽快に走る。

通りで掃除していた仲居二人、走り抜ける妙子を見送って――

仲居 A「静乃家の妙子はんどっしゃろ」

仲居 B「ええ娘はんにならりましたな、市の観光課へ勤めてはるんやそどうすな」

仲居 A「勿体ないこつどすな、なんで芸妓に出さはらへんのどっしゃろ」

15 松原橋

妙子、自転車で渡って行く。

16 河原町通り

妙子の自転車が走る。

17 市庁舎の表

妙子の自転車くる。

18 観光課写真部

妙子、入ってくる。同僚と朝の挨拶を交わして机に行き、向いの机をみる。そこに、男物の鞆が置いてある。

19 暗室

拡大されるネガ像、妙子の顔である。

孝次の横顔が、神経質な広い額が、暗がりの中にほの白く泛んでみえる。

妙子の声「入っている」

孝次「（ネガをみつめた儘）ああ」

妙子、カーテンの向うから入って来て、

孝次の背後から窺つと覗きこむ。

妙子「わたしじゃない……どうなさるの」

孝次「おふくろにみせるんだよ」

妙子「きのうね、話したわ……母さまたち、

いいって……」

孝次「そう、僕もきょう話す」

妙子「わたし、うんというお嫁さんになるわ」

間近かに顔が合う。呼吸を感じ合うような距離――妙子は、きこちなく眼をそらす。

妙子「電気つけていい」

孝次、壁へのばした妙子の手を握る。

再び間近に見合う燃えるような二人の瞳

孝次「妙子ちゃん」

妙子「（低く）いけないわ。こんな所で……」

孝次、抱こうとする。妙子、身を翻す。

20 小路（ひる）

小路の入口に自転車が着く。

きくが、げつそりやつれた福弥を扶けて下りる。

小路の両側に軒を並べたお茶屋の格子戸から、せんさく好きな顔、顔、顔が待構えたように覗く。

女将 A「退院しやはったんですか」

きく「へえ、お蔭さんでどうやら……」

女将 B「えらいこつとしたな……（福弥に）

大事にしとくれやっしや」

福弥「へえおおきに」

仲居 A「福弥はん、早う元気になっておくれやっしや」

福弥「へえおおきに」

きくと福弥は、挨拶をしながら、静乃家の玄関へ入る。

21 静乃家の玄関

きく、福弥が入ってくると、土間の奥からめし焚き婆さんが出迎える。

婆さん「お帰りやす」

きく「お蒲団敷いてあるか」

婆さん「へえ（と福弥に）運の悪いこつちやな」

22 奥の部屋

妙子の部屋の隣りの四畳半の、天井の低い古い作りの部屋、入口の反対側に小さな腰高窓が一つ。

部屋には古簞笥と小さな鏡台があり、簞笥の上には福弥のこまごまとした持物が並んでいる。部屋一ぱいに蒲団が敷いてある。

きく、福弥を扶けて入って来て、簞笥から浴衣を出す。

福弥「お母はん、わてがしますよって……」

きく「なにいうてるねん、あんたは病人やな

いか。さあ、早う着替えて、静かに寝てな
あかん」

福弥「へえ、おおきに」

と着替える。きく、手伝ってやり、寝か
せてやる。

きく「病院の先生がいうてはったやろ。安静
がなによりやよってな……ええか、じっと
してなあかんえ」

福弥のうるんだような眼がきくをみる。

福弥「お母はん、かんにんどっせ……こない
事になってしもうて」

きく「もうええ、何もうわんととき……」

福弥「すんまへん……」

さらに、福弥の眼に涙。

「お母ちゃん！ どこにいやはるの」

甲高い君蝶の声が居間から呼ぶ。

23 居間

君蝶、焦立つ感情を抑え兼ねて突っ立っ
ている。

瞳の奥に激しいものがひそんでいる。

きく、くる。

きく「福弥がな……」

君蝶「（遮ぎる）お母ちゃん、この家抵当に
入れはったんか」

きく、黙って眼を伏せる。長火鉢の前に
坐る。

君蝶「（立った儘）うちに内緒で、なんでそ
ないないらんことしてくれはったん」

きく「（低く）お前にいうたら、許してくれ
へんやないか」

君蝶、じっと母を見下している。怒りの
眼ざしに一抹の寂しさが漂う。

君蝶「お母ちゃんはんなんちゅうひとやろ。こ
の辺のひとはみんな笑うてはるで……ひと
を助けるのもええ、お母ちゃん流にいうた
らご恩返しやろ、そやかて、うちらが食べ
るにも困ってまで、義理立てせんならんこ
とないやないか。二十万ちゅうお金、どこ
で工面するつもりや」

きく「誰ぞにこの家を買うて貰うて……その
ひとから借りて住んだらどうやろ」

君蝶「（坐り）そないな阿呆がいまどきどこ
の世界に生きてる！ 借りる前に追い出さ
れてしまいわ」

きく「（哀願の眼ざし）お母ちゃんにご恩返
しさせてえな……これからわても働くつも
りや、もう一べんお座敷へ出てもええ」

君蝶「なにいうてんね、お母ちゃんみたい
なお婆ちゃんがお座敷動まるかいな、めし焚
き婆さんならでけるかもしれへんけど」

きく「そやかで、君蝶、秀雄はんが涙をこぼ
さはってな、ご恩は一生忘れまへん、と手
合わさんばかりにおいいやしした」

君蝶「阿呆臭！ やめといて」

と横を向いてしまふ。

きくは逃れるように

話題を交える。

きく「病院の先生がいうてはったけど……福
弥はよっぽど悪いらしいんや、この夏が危
いいうてはった」

君蝶「（横を向いた儘）気持ちの張りが足ら
んよって病氣にとりつかれるんや」

きく「聞えるやないか、大っきな声出さんと
き」

君蝶「（低く吐き出す調子で）病人を抱え
て、せんでもええ借金まで背負いこんで
（くるりふり向く）お母ちゃん一人で勝手
にしよし！」

顔をそむけて立ち、つかつかと土間へ下
りて駆け出すように出て行く。

小路

君蝶、感情を叩きつけるように下駄を鳴
らして駆け行く。

歌舞練場の一室

舞いの稽古場。

君蝶の美しい顔が、冷たく静かな表情で
藤娘を舞っている。

左右にずらりと並んだ芸妓。お師匠さん
の手から弾けるような三味線の音。君蝶
の澄んだ眼ざしが静かに舞う。

26 四条大橋

妙子と孝次、自転車で大橋を渡ってくる。

妙子「さよなら」

孝次「じゃ、あとで……」

妙子は南座の角を宮川町へ折れ、孝次は真直ぐに祇園の方へ。

27 祇園甲部の通り

孝次、一力の角を折れて走る。

通りかかる四五人の舞妓が、黄色い声で挨拶。

孝次、無愛想に挨拶を返し、通りを折れる。

28 菊亭の表

静乃家比べて格段の違いをみせる構え

孝次、自転車で横手へ廻り、勝手口から入る。

29 内玄関

孝次、入ってくる。女中、迎える。

女中「お帰りやす」

孝次「(上り)お母さんは」

女中「へえ、いやはります」

孝次「そう」

と居間の方へ行こうとする。

女中「伊勢浜はんが来てはりました」

孝次、立上って女中の顔をみる。ためらう眼ざし。

30 居間

女将千代(孝次の養母)、コーヒを淹

れている。

伊勢浜、巨大な体軀を横たえて按摩をとっている。年増芸者友香が喋っている。

友香「そもそも、えらい評判とつせ。お家を抵

当に入れてまで出さしたんどすさかい」

千代「(皮肉に)柄にもない瘦我慢しやはつ

たもんや」

伊勢浜「(笑いながら)美談やないか。ちょいとな話やで……相手は落目の旦那の息子やる。でけんこつちや、(按摩に)もうええ」

按摩「へえ、おおきに」

友香「静乃家はんとお母はんは、昔馴染やそ

うどすな」

伊勢浜「舞妓の時から姉妹芸者や、なあ千代」

千代「へえ、まあ、そんなもんどつしやろ」

按摩「おおきに、ごめんやす」

と帰る。伊勢浜、長火鉢の前に入る。

千代「きくさんいうおひとは、馬鹿な真似どとが昔からお好きです。宮川町なんかに囲

われんでも、ちゃんとした旦那が持てるの

んに、好きこのんで渡辺はんに心中立てしやはつたんや。屋台骨まで抵当に入ればつて身ぐるみぬいだら、さぞご満足どつしやろ」

伊勢浜「そやかてな、誰にもでけるこつちやないで」

千代「(尖って)わてかて、いざとなつたら

伊勢浜「ほう、えらい意気込みやな……ひと

つ馬でも買うて損したるか」

千代「阿呆なこといわんといとくれやす」

女中がくる。

女中「お母はん、若旦那さまが一寸……」

千代「帰ったん？」

女中「へえ、なんやら知らんご用がおりや

そうどす」

千代「なんぞ用か？」

孝次、ふり向く。沈んだ瞳に臆病な色を

泛べている。

孝次「うん、一寸……お母さんに、お願いがあるんです」

千代「なんや、改って——」

32 居間

伊勢浜、友香の酌で飲んでいる。

伊勢浜「静乃家のおきくさんとうちのあれが、渡辺はんを張り合いつてな」

友香「へえ、死なはつたおきくさんの旦那はんを……」

伊勢浜「結果、軍配がおきくさんにあがつたわけやな……千代は失恋したちゅうことになつたんや」

友香「へえ、そうどすか」

伊勢浜「人間、何が幸いするか分らん。ふられた千代は民友党の河野はんに拾われよ

ってな、ここを出して貰うたんや」

友香「河野はんで死なはったんどっしゃろ」

伊勢浜「(笑つて) そんなこと当り前やがな。あと金にわしが坐つてやるやないけ、は、は、は……」

33 孝次の部屋

千代、顔色を変えている。

千代「静乃家の妙子はんと結婚するといふのか」

孝次「約束してゐるんです。一年前から」

千代「あきまへん！ きょう限り、きっぱりやめとくれやす」

孝次「でも……」

千代「(遮ぎる) お茶屋はんの娘みたいなの、お嫁さんにでけますかいな」

孝次も奮きめている。言葉は低いが懸命の努力でいう。

孝次「そんなこといつたつて、うちだつてお茶屋じゃないですか」

千代「お茶屋はお茶屋でも格式が違ひまつしやん！」

孝次「じゃお母さん、どうしてもいけないんですか」

千代「(きっぱり) 絶対にあきまへん」

孝次「でもうちは、きょうまで静乃家さんとおつき合ひの間柄じゃないですか」

千代「表向きの義理つき合ひや……あんたがなんぼいわはつても、こればかりはあき

まへんえ」

孝次「……………(みつめている)」

千代「きっぱり断わつとくれやす」

孝次「……………(みつめている)」

千代「あなたにでけなんだら母さんが断つて来ます」

孝次、さつと立つ。

千代「孝ちゃん！」

孝次、駆け出すように出て行く。千代、廊下へ追つて出る。

千代「孝ちゃん！」

34 静乃家の小路
内玄関を出て行く格子戸の音。

千代、急ぎ足にくる。両側の軒にはもう灯が入っている。静乃家の格子を開ける。

千代「ごめんやす」

35 土間と玄関

きく、居間から出てくる。土間は薄暗くて、訪れた人が急には分らない。

きく「(窺うように) おいでやす」

千代「おきくはん、お久しゅう……わてどす」

きく「まあ、お千代はんどすか、どうぞお上りやして……」

千代「へえ、おおきに……ほな、ほんの一寸……」

36 表の間

お座敷着をつけた君蝶、鏡を覗いていた

が——窃つと居間の方をうかがう。

37 居間

きく、千代、入ってくる。

きく「(座蒲団を) どうぞ」

千代「へえ、おおきに」

二人は長火鉢を挟んで坐る。

きく「ご無沙汰してます」

千代「こつちやこそ、えらいもう……」

きく、お茶を淹れて出す。

千代「どうぞかまわんといとくれやす。すぐかえらして貰いますよつて……」

きく「そないいいわんと、まあゆつくりしとくれやすな、(懐しそうに) いつ会うてもあなたはお変わりしまへん。ちよつとも年とらはらしまへん」

千代「そうどつしやるか。おきくさんかて、いつまでもお元氣やおへんか」

格子戸の開く音がして「お母ちゃん、あつたわ」と妙子が土間から現われ、千代をみて、

妙子「いらっしやいませ」

と丁寧に叩頭する。

千代「こんばんは」

きく、瞳の隅から妙子をみる。

妙子は上り、千代のうしろを通つて奥へ行く。

千代「大っきゅうならはりましたな」

きく「(笑顔) ほんまに、なりばつかり大

ゆうて……」

38 福弥の部屋

福弥の蒼い顔が寝ている。妙子、入ってくる。

妙子「福弥さん、これを飲むといいわ。スッポンの血よ。とても胸の病気にいいんだって……」

と、風呂敷から瓶を出す。

福弥「おおきに、すんまへん」

妙子「これ（と風鈴を出し）、あなたが退屈すると思つて季節はずれだけど買つて来たの」

と、立つて軒に吊り、居間の方をうかがう。

39 居間

千代、お茶を一杯飲んで改まる。

千代「お伺いしたのは他でもない、妙子はんのことです」

きく「おおきに、こつちやからも一ぺん伺わせて貰おう思うてましたんどすけど」

千代「わてはなんにも知らへなんどすけど、きよう孝次からきいて寝耳に水、吃驚したんどっせ」

きく「（千代の真意が分らず）そうとすか、孝次さんがあと月の終りに来てくれはりましてな」

千代「（丁寧な調子で）この話、お断りさして貰おうと思つて、お伺いしたんどす」

きく「……………（驚いてみつめる）」

40 福弥の部屋

妙子、はつとしたように、居間の方をみつめている。

41 居間

千代、落着いた表情で、言葉静かにつづける。

千代「孝次は道楽仕事に観光課へ勤めてますけど、いずれはうちを継がんならん大事な息子です……お嫁さんは、ちゃんとしたお家から貰わんならん思うてますさかい……」

きく「……………（言葉静かに）うちの妙子がちやんとしてへんといわはるのどすか」

千代「誤解して貰うたら困ります。妙子はんはケチつけるのやおへんけど、祇園の菊亭ちゅうたら一寸は人に知られた家柄どす。格式ちゅうもんがありますさかいな」

きく「……………（言葉なくみつめていな）」

千代「妙子はんによいいうといとくれやす。これからそのつもりでつき合うとくれやすって……」

君蝶、つかつかと入ってくる。顔色が変つてゐる。

君蝶「（立つたまま）お母ちゃん、こんだけ馬鹿にされてなんにもいえへんのんか……」

きく「これ、あっちへ行つといで」

君蝶「菊亭はんがどれだけ偉いか知りまへん

けど、こつちやも同じ人間や。五分と五分どす。（と千代の前に坐り）菊亭はん、格式ちゅうもんがどんだけ違ううたかて、どうせ高が知れたお茶屋稼業や、泥水稼業どす。それとも菊亭ちゅうたら、特別の位でもありますのどすか」

千代「（も蒼さめ）君蝶はん、あんたも立派なお口が利けるようにならしたな。よう覚えさして貰いまっさ」

君蝶「（膝を進め）どうぞ、どうぞ、よう覚ええといとくれやす。痛うもかゆうもおへんさかいな」

千代「（落着こうと努力し）噂にはきいてましたけど立派なおひとや……腕によりかけてえげつのうおやりやそうどすな。今度

は速神丸の番頭はんどすか」

君蝶「（ひるます）へえ、ようまあ知つてはりますな。こつちやは肉体派どすよつてな、ええ男はんなんぼでもモーションかけまっせ」

きく「（はらはらして）君蝶、やめとき、（千代に）お千代はん、勘忍しておくれやっしや」

千代「おきくはん、妙子はんの事はきっぱりお断りしましたえ」

君蝶「（強く）ごちゃごちゃいうてんと、さっさいんどくれやす」

千代「へえ、おおきに、さいなら」

憤然と立って玄関へ。きく、おろおろと送って行く。

土間隅からそっとめし焚き婆さんがうかがっている。

君蝶「(叫ぶ)母ちゃん、早う塩撒いとき!」

がちゃん、びしゃり、格子戸の音。

42 加茂川

音もなく紅燈の灯影を映してゆれる浅い流れ。

河原に黒い影が二つ——妙子と孝次が佇んでいる。

孝次「(ぼつんと) つくづく、いやんなった

……こんな世界が……」

妙子「(仰ぐ) お酒飲んでらっしゃるのね」

孝次「(自嘲) やけ酒さ」

と歩きます。

妙子「ねえ」とうしろから呼ぶ。

妙子「わたしも家を出るからあなたも出て……」

……」

孝次、沈んだ眼で流れをみている。

妙子「ねえ孝次さん。そうしましょう」

孝次「(咳くように) そう簡単にはいかな

よ」

妙子「二人で働けばどうにかなるわ」

孝次の暗い瞳がじつと妙子を見る。

孝次「僕は、君ほど自由じゃないんだ……養

子なんだからね」

妙子「あなたの辛い立場は分るわ。でも、こ

の儘でいたらわたし達はどうなるの」

孝次「……………(みつめている)」

妙子「ねえ、勇気を出して……」

孝次「妙ちゃん」

不意に激情的に抱く。乱暴に接吻する。

妙子、される儘に委している。

孝次「(燃える瞳で) 妙ちゃん、僕から離れ

ないでくれ」

妙子「(荒い呼吸) あなたこそ」

孝次再び激しく接吻。抱きかかえ、すぐ

傍の河原工事の掘立小屋へ。妙子、おび

えたような瞳で孝次を仰ぎ、微かな抵抗。

妙子「いけない……離して……」

孝次、しっかり抱いた儘葉の上に膝を折

る。

妙子「(喘ぎながら) 駄目、いけない……離

して」

頭上を轟々と京阪電車が通りすぎる。

孝次「(乾いた瞳で) 妙ちゃん、いいだろ

う、許してくれ」

妙子「(理性を失いかけた瞳で) 結婚して下

さる? ねえ、結婚して下さる?……」

孝次「……………(みつめる)」

妙子「ねえ、結婚してね……約束してね」

孝次、気狂いのように抱きしめる。

妙子「(必死に抵抗しながら) ねえ、仰有っ

て……仰有って……」

孝次、無言で顔を寄せてくる。

妙子、激しく突きのけて裾を直す。呼吸荒く対立。

妙子「(鋭くみつめ) 何故仰有って下さらないの……約束して下さらないの」

孝次の瞳に、急に弱々しい惨めな翳が曇る。

孝次「妙ちゃん……」

妙子「卑怯者!」

43 ダンスホール

鳴り騒ぐ、祇園ブギウギ。芸妓と洋服の紳士。洋装の芸妓と和服の旦那のシルバ

ー。時代が描き出す珍妙な色模様。

君蝶、速神丸の山下(洋服姿)と踊っている。

君蝶「(頬を喰つつくんばかりに) ねえ、な

んとかでけまへんか」

山下「二十万ちゅうたら大金や、おいそれと

でけるかいな」

君蝶「ほな、ケッコウどす。こっちゃんも考

えがありますさかい」

「とんぼ」も客と踊っている。

とんぼ「お姐はん、こんばんわ」

君蝶「こんばんわ」

と一方をみて——眼をとめる。入口か

ら、伊勢浜と千代が四、五人の舞妓を連

れて入ってくる。でっぶり太った伊勢浜

は派手な洋服が似合っている。伊勢浜と

千代たちは酒場のテーブルへ行く。

君蝶、踊りながらじつと伊勢浜の方をみている。

山下「五万位なら、なんとか無理でけん事も
ないやろ」

君蝶「もう宜しゅうおす」

山下「怒ったんか」

君蝶「怒ったか仕様おへんどっしゃん」
と酒場をみる。千代が洗面所の方へ立つて行くのがみえる。

山下「帰ろうか」

君蝶「そうどすな」

山下「こないところひとにみられたらあか
ん。帰ろう」
と腕をひく。

君蝶、クロークの方へ行く山下を見送つて、酒場の伊勢浜へ。

君蝶「伊勢浜はん、こんばんは」

伊勢浜「よお、君蝶じゃないか」

君蝶「（色っぽく）踊っとくれやす」

伊勢浜「わい、へたやで……足ふむで」

君蝶「伊勢浜はんにふんで貰うたら本望どす」

伊勢浜「（笑つて）そら、光栄やな」

二人はフロアーへ。千代、戻ってきて、伊勢浜の姿を探す。

クロークの所では、山下が君蝶のハンドバックを持って焦々待っている。

君蝶、伊勢浜踊る。

君蝶「お上手やおへんか」

伊勢浜「どうぞどうぞいうとこや」

君蝶「しつかり抱いとくれやす」

伊勢浜「誰ぞに怒られるんと違うか」

君蝶「阿呆な、目下のところ寂しゅうてか
んのどっせ。どこぞええひとおらへんか。
あ痛た！」

伊勢浜「かんにん、かんにん、すまんこつちや」
としゃがみこみ、ふんだ足をさすつてや
る。

みづめていた千代、むっとした顔で出て行く。

44 伊勢浜の表（灯入時）

黒塀をあしらったいき作りの小料理屋。

君蝶、足も軽く来て、入る。

45 店の間

板前で料理をしている割烹前かけの伊勢
浜——吸物の味をみている。

伊勢浜「（手許をみた儘）いらっしやい」

君蝶「こんばんは」

伊勢浜「なんや、君蝶やないか」

君蝶「お忙しゅうおすか」

伊勢浜「ま、ぼちぼちやな」

伊勢浜の女房おとき、二階から忙しそうに下りてくる。

おとき「竹の間はん、赤だし……すぐきがご
注文どす」

伊勢浜「おいきた」

君蝶「お母はん、こんばんは」

おとき「（愛想よく）どんなしてはったんど
す。たまには顔みせとくれやす（と店をみ
て）おひとり？」

君蝶「へえ、伊勢浜はん、お誘いに来ました
んどっせ」

おとき「（やはり愛想よく）おおきに、仲よ
う遊んであげとくれやつしや。ダンス気狂
いどすよつてな」
と、出た赤だしを持って二階へ。

君蝶「（伊勢浜に）ええ奥さんどすな」

伊勢浜「わいはこの家ではのけもんや。誰も
相手にしてくれよらん」

君蝶「踊りにいきまほうか」

伊勢浜「一寸待つてや、いま板前はんが戻つ
てくるよつて……なんぞ食べへんか」

君蝶「おおきに」

伊勢浜「なんにする」

君蝶「ほな、おビール、貰いまっさ」

と煙草に火をつける。それを、店の隅の
小座敷から、客と一緒に来ていた友香が
みつめている。

46 菊亭の居間（夜）

千代に、友香が忠義顔で喋っている。

友香「二人仲よう、ダンスにいかはったんど
すがな」

千代、不機嫌に長煙管を吸いつける。

友香「お母はん、ぼつぼつ警戒警報どつせ、なんちゅうても静乃家の君蝶ちゅうたら、名代の凄腕どすよつてな」

千代焦々と煙管を叩く。

友香「あのひとにおうたら、たいがいの男はんはいちころどすよつてな」

47 琵琶湖

モーターボートをとばす君蝶と伊勢浜。

君蝶はサングラスにチューインガム。伊勢浜の底抜けに明るいう。

48 湖畔の貨座敷の一室

浴衣の君蝶、ごくごくと咽喉を鳴らしてビールを飲む。

伊勢浜、おっとりした顔で、感心したようにそれを見守っている。君蝶、一息に飲みほし、ふっと大きく息を吐く。

君蝶「ああ、ええ気持……熱うなった……」

胸許をぐいとひろげ、にっと笑う媚態。

君蝶「ごめんやっしや」

畳に体を投げ出す。裾が乱れ、投げ出した白い二の腕——くねった曲線が挑発的である。

伊勢浜「寝たらあかんで……風邪ひくがな」と羽織をかけてやろうとする。君蝶、その手を握る。

君蝶「（こぼれるような眼ざし）うち、伊勢浜はん好きや」

伊勢浜「……（笑っている）」

君蝶「好きになってもかましまへんか」
伊勢浜片方の手をのばして肩を抱く。
伊勢浜「仲ようしようか」

君蝶、はにかんだように媚態を作り、脚で障子を閉める。

49 西洞院五条辺の裏町

きく、土産物の風呂敷包みを抱え、訪ねる先を探しながら行く。

50 小さな古着商の表

きく、立止り、表札をみて店内を窺う。

51 店

帳場格子の中で、すっかり商人らしくなった秀雄が算盤を弾いている。きく、入ってくる。

きく「ごめんやす」
秀雄「おいでやす（見上げて驚く）おきくさん……よう来てくれたはったな」

きく「ええお店どすな……若旦那はんもすっかり商売人にならりはりまして……」

秀雄「（明るく）まだ見習やけんど、どうにかこれで飢えんですむわ。みんなおきくさんのお蔭どす」

きく「なををいいやっしやら、そないいうて貰うたら氣づつのうて（と土産物を出し）しよむないもんどすけど、ご隠居さんに……」

秀雄「こないして貰うたらどもならんな（と奥へ）、せつ、いやへんか、おきくさんや

で」

その声に、奥から乳呑子を抱いた妻せつが出て来る。

せつ「おいでやす。おきくさんもお交りのうて——」

きく「へえ、ご無沙汰ばかり……ばんも大きくゅうおなりやしたな」

せつ「おかげさまで……」

秀雄「おきくさん、むさ苦しいところやけどまあ上つとくれやす」

きく「へえ、おおきに」

せつ、子供を秀雄に渡し、急ぎ奥へ入る。

秀雄「さあ、どうぞおきくさん」

きく「ほんなら一寸……ご挨拶さして貰います」

と上る。

52 奥の間

ごたごたと物が並んだ薄暗い部屋。蒲団の上に起き直った老婦人藤尾に、せつが羽織を着せかける。

せつ「お母はん、おきくさんが来てくれはりました」

藤尾は耳が遠くてよく分らない。

きく、腰を低く入って来て、敷居際に両手を突く。

きく「ご隠居はん、お久しぶりさんでございます」